質問紙調査による「私」への「なぜ」という問い——自我体験——の検討

天谷 査子
（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

「私はなぜ私なのか」「私はなぜ他の時代ではなく、この特定の時代に生まれたのか」といった、私そのものへの問い —— 自我体験 —— が、どれくらいの割合で、いつ頃見られ、どのような情動や行動を伴うのか。そして自我体験の内容について検討することを目的に、中学生から大学生881名を対象に、自由記述を伴った質問紙調査を行った。その結果、379名（43％）から自我体験が報告され、発達については、小学校後半を中心にややバラツキが見られることが示された。また、必ずしもきっかけがなくても生起し、他者への関与はあまり見られないことが示された。そして、自身の自我体験に意味を見出している人は少数派であったが、より年上の世代の方が、意味を見出している人が多い結果となった。本研究の結果、自我体験は一般に多くの人に共有されている問いであることが示された一方で、全ての人に見られる現象ではないことが示された。また子ども世代であっても、「私」について抽象的に考えることができる可能性が示唆された。

【キーワード】「私」、「なぜ」という問い、自我体験

問題と目的

抽象的な「私」への意識や思考に関する研究は、青年期を対象とした自我意識・自己概念研究が主要である。しかし、青年期以前の児童期後半からその萌芽は見られることはずである。また児童期後半から青年期にかけての自我・自己研究は、青年期への移行の様相を明らかにする上で重要であると思われる。それにも関わらず実際にこの時期の自我・自己を検討した研究はあまり見られない。松田（1986）も、自己の構造について発達的観点から10歳前後が不明確な点を指摘している。本研究では、この児童期後半から青年期初期の時期に出現する現象に注目する。それは「いわゆる自我体験」（松田，1990）と呼ばれるもので、「私はなぜ私なのか」「私はなぜ他の時代ではない、この特定の時代に生まれたのか」といった、「私」への問いである。この自我体験に注目することとは、発達的観点から見て不明確なこの時期の自我・自己研究に新たな知見を提供すると考えられる。

また松田（1983）は自己意識の発達研究について、客体的な自己意識の発達と主体的な自我の持たれ具合をどうつまっていかが課題であるとし、青年期になると自己意識と自我体験の関係が次第に大きく関連してくると述べている。今まで客体的な自己意識は、Rogersの流れをくむ一連の自己概念研究、自尊感情（Rosenberg, 1965）の研究、社会心理学的背景を持つ自己意識理論（Fenigstein, Scheier, & Buss, 1979）等において検討されてきた。しかし、主体的な自我（本研究ではJames, 1892/1992によるものを想定している）については心理学の対象から排除され、客体としての自己の検査を通じて間接的に探求するにとどまっている（桜本, 1998）。本研究で取り上げる自我体験は、主体的な自我について問いかけて思考したとする過程を、一つの体験として取り上げるものである。その意味で自我体験は主体の自我に関する思考過程を捉えており、自我・自己の研究に新しい切り口を与えると考えられる。

さて、自我体験の定義については、西村（1978）、高石（1988）、渡辺・小松（1999）、天谷（2002）のものが見られる。西村（1978）は自我体験を「自己を自己を知る無限の可能性と絶対性において経験すること」とし、この自我体験を基盤に安定した青年期後期を迎えているとしている。そして高石（1988）は自我体験を「意識の中心である自我が、無限の時間的、空間的広がりを持って自己という内的世界の全体性の中にあり、位置づけられ、自我が自己自身の新しい結びつきを獲得して、より高次の統合性に向かう原動力となる体験」としている。また渡辺・小松（1999）は自我体験を「なぜ私は私なのかという問いを中心に、それまでの自己の自明性が疑問視される体験、および、この困難な疑問への解決を与えようとする思索の試みであって、自己の自己性の他者の強い意識を伴ることもある」としている。そして天谷（2002）は、これらの先行研究における自我体験の定義において、「私」「自己」「自己」という表現の中に、多様な内容を
質問紙調査による「私」への「なぜ」いう問い — 自我体験 — の検討

同時に行なうことを考慮に入れ、「私」を「私1」と「私2」の2つの水準に分けることを提案している。

天谷（2002）によると、「私1」は「その人の属性や身体といった諸規定から成る具体的に現在ある個人としての「私」（私）と独立したもの（私2）」である。この「私1」は、デカルトによる「私」、永井（1996）による「私」とに相当するという。デカルトによる「私」（注1）の「関係現象」を指すと、そして永井（1991）はデカルトの「私」を指すと表現し、「今またまく私である人間は、身体の時空的な連続性を持ち、身体の意味的連続性も異なることなく「私」でなくなることができる」と説明している。永井（1998）はく私への問いの具体例として、1991年には、二十一世紀の後半というこの時期において、そしておそらくこの時期だけに存在している。私は十三世紀にも、二十三世紀にも存在することができたはずだし、しかし時代にもまったく存在しないこともできたはずである。しかし、私は誕生し、今ここに（だけ）存在している。これは驚くべきことではないか。と述べている。この問いにおける「十三世紀にも、二十三世紀において存在することができたはず」の「私」が、天谷（2000）に相当するとと思われる。そしてこの「私1」は仮定的なものであり、その在（例えば時間に身体を失った後存在し続けるかどうか）は確認できない。関野（1991）も永井のく私について「通常の意味で生きている限りく私」は時に「私でもある。」、「私」を離れたものとしての純粋なく私によって語ろうとする事は不可能」と述べている。一方く私2」とは、「ここにいる。この時代にある。このような体で、このような特性をもつ」ような「私」で、特性・個性・他の人と分ける特徴・「私」自身の存在だけを指すものとしての「私2」は、それとは異なり、現在実存している「私」の諸属性から成り立っている。

以上の「私1」「私2」の考え方を取り入れると、例えば「私1」の後半には「私1」の名前だけを指し、一方「私2」の名前だけを指す。「私2」の名前を指し、その名前だけを指す。「私1」と「私2」の関係は（の偶然性もしくは必然性）をめぐる問いとされる。このような「私1」をめぐる一連の問いを、天谷（2002）は「「私1」について「なぜ」いう問いや感覚的異和を持ち始める体験」とし、自我体験の定義としている。研究においても、自我体験の検討には「私1」「私2」の2つの水準に分けて検討することを重要視し、天谷（2002）の自我体験の定義を採用することとする。

また、自我体験に関する実証的研究については、小学生を対象に自我体験に関連した様々な部分体験について質問紙調査を行った宮脇（1986）の研究や、大学生を対象に自我体験の例についての評価と自由記述によって調査を行った渡辺・小松（1999）の研究が見られる。また、天谷（2002）では、中学生20名を対象とした単構造面接により、自我体験の具体的な内容を質的に検討している。その結果、30名から自我体験が発表され、発表は小学校半ばから後半を中心にパラソキが見られ、直接的なきっかけがなくても生起し、他者に体験内容を開示しにくいことが示唆され、そこで「存在への問い」「発達・場所への問い」「存在への感覚的違和感」の3つの下位側面が示された。

この3つの下位側面のうち、「存在への問い」には、「私はなぜ私2なのか」といった「私1」と「私2」の関係性への問いと、「私の存在理由への問い等が含まれる。」存在への問いには、「私1」が存在の時に存在しているのか」という問い、そして「私2」が存在の時に存在しているのか」という、一体何だろうか」という。「私1」と「私2」の身体と他の存在が違和感を含む。研究においても、この3つの下位側面を採用することとする。

以上の自我体験に関する実証的研究は、「自我体験とはどのようなものか」といった、「自我体験の定義やその内容・下位側面に注目した研究や、少人数を対象に、自我体験の報告される割合や発現時期について検討した研究である。しかし、「自我体験が一般にどれくらいの割合で見られるのか（以後「体験率」と表記）」、「自我体験は個別発達上のひと言報告されるのか（以後「初発時期」）」について検討した組織的な調査研究はまだ見られない。

まず、自我体験の体験率については、西村（1978）が「一般的には起こりにくい」と指摘している一方、高石（1998）は「あらゆる人に普通に起こりうるもの」と述べている。また、渡辺・小松（1999）による大学生対象の質問紙調査では27.5%（345名中95例）、天谷（2002）による中学生対象の面接調査では63.3%（60名中38名）という結果が示されている。しかし、同一調査方法により重複年齢層を対象に、体験率を検討したものはまだ
見られない。年齢が上がるにつれ、体験頻度がどのように変化するかを検討する必要がある。

そして、自我体験の初発時期について、臨床的経験から西村（1978）は12〜18歳頃と考察し、渡辺・小松（1999）の大学生対象の調査では、小学校低学年にピークがあると報告している。また天谷（2002）の中学生対象の調査では、小学校中高学年中から中学にかけて多いと報告している。これらの研究は、ある特定の学校段階のみを対象に、初発時期を検討したものである。しかし広い年齢層を対象に発達時期をおさと検討することが必要である。このような検討は、今後の自我体験の性格づや自我体験の生起に関連する特徴を検索する上で重要と思われる。

また、自我体験生起のきっかけ、自身の自我体験の意味付け、体験内容の他者への開放の有無といった、自我体験の関連情報について検討することは、自我体験がどのような状態で体験されるのかを明らかにする上で有用であると思われる。しかし、先行研究において大サンプルで検討している研究はまだ見られない。また、先行研究で検討されてきた自我体験の内容についても、さらなる検討が望まれる。

以上の問題点を考慮に入れ、本研究では、中学生から大学生を対象として、組織的な質問紙調査により、自我体験の体験頻度、初発時期、きっかけ、意味付け、他者への開放の有無、自我体験の印象について調べる。それにより、先行研究で十分に検討されてこなかった自我体験の構造について検討することを目的とする。

方 法

対象 中学生から大学生の男女881名。内訳は中学生424名（男200名、女224名）、高校生307名（男133名、女174名）、国立大学生150名（男78名、女72名）。なお、中学生の一部と高校生は、中高一貫校の生徒である。

調査時期 1997年9月

質問紙作成 質問紙は、(a) 自我体験の内容に関する質問項目と自由記述、(b) 自我体験の関連情報についての質問から構成される。(a)+(b)で13セクションで、それぞれ3セクション設けられている。(a)の質問項目は、全被調査者が評定する（回答は、「4）思ったらことがある」「(3) 近いことを忘れたことがある」「(2) なんといかあったような気がする」「(1) 想いがなかった」の5項目で評定される。そして(a)の質問項目のうち1項目以上高評定（評定2以上）をつけ、それに似たことを忘れたことがある人は、(a)の評定に加え、(b)の自由記述とそれに続く(b)自我体験の関連情報についての質問に回答する。(a)の質問項目のいずれについても似たことを忘れたことのない人は、(a)の自由記述と(b)自我体験の関連情報は回答しない仕組みとなっている。

(a) 自我体験の内容に関する質問項目：自我体験の例を集めた15項目を質問項目とし、それを似たことを思ったことがあるかどうかをたずねる。質問項目は、天谷（2002）で、面接導入に使用した質問紙の質問項目の中から、自我体験を収集できた割合の高かった8項目を採用した（天谷2002）では10項目であったが、本研究ではうち2項目について、1文を2文に分割し、8項目とした。また、天谷（2002）の面接で得られた自我体験の例を質問項目として7項目作成し、計15項目とした。

また、質問項目は内容面から3セクションに分け、各セクションごとに、高い得点を示した項目（評定2以上）について、それぞれ体験内容の具体的な自由記述を求めた。3セクションに分けた理由は、調査者若者多様な内容の自我体験を経ていて場合、複数の報告を収集したかったためである。第1セクションは天谷（2002）における自我体験の下位側面1) のうち「起源への問い」である。「1.自分はどこから来たのだろう？」「2.自分はどこへ行くのだろう？」。第2セクションは「存在への問い」である「1.自分は何だろう？」「2.自分は誰だろう？」「3.一体何をもって「自分」としているのか？」「4.自分の体って何だろう？」「5.自分の存在そのものが不思議だ。」「6.自分は本当に自分か？」。第3セクションは「存在への問い」起源場所への問い」のより具体的な例と想定される「1.自分はなぜ自分なのか？」「2.だれでもなく、どうして自分なんだろ？」」「3.自分が自分でこれに不思議だ」「4.なぜ私はこの体をえらんだのか？」」「5.私が私としてでなく、他のだれとしても生まれたことをもたれたのに、どうして私となっているのだろう？」「6.いろんな人がいるのに、なぜたまたま私なんだろう？」「7.自分はなぜ、他の国や他の時代ではなく、日本の、この時代に生まれたのか？」。

(b) 自我体験の関連情報：(a)の各セクションにおいて、少なくとも1項目以上に高評定（評定2以上）をつければ、かつ自由記述が見られたものをについて、初発時期、体験に意味があったかについて自由記述を求めた。そして他者への開示について、「はい」「いいえ」の二択選択で評定させた。さらに、自我体験の印象について、「印象的」「それほどでもない」「印象的でない」の三択選択で評定させた。また、きっかけについて「きっかけがなかった」 「きっかけがあった」「授業で聞いたたんに人に言われた」 「テレビや本で似たことを見た」が1) 天谷（2002）の自我体験の下位側面のうち、「存在への感情的論和感」については、本研究では独立した概念として扱わないこととした。その理由は、第1にこの下位側面は質問項目のみで表現しにくい。第2に被調査者に視覚的な意味合いが受け止められる場合があり、回答への理解を妨げると考え、第3にこの下位側面が、他の下位側面において感情的論和感を感じるという形で報告される可能性が高いためである。
質問紙調査による「私」への「なぜ」という問い — 自我体験 — の検討

1. 自我体験の体験率
自由記述の分類の結果、体験率は全体では43.0%（379名）であった。また学年別では、中1が44.2%、中2が30.6%、中3が44.6%、高1が46.0%、高2が34.0%、高3が43.2%、大学生が57.3%であった。天谷（2002）の中学生60名対象の面接調査では、38名から自我体験が報告された。また、大学生対象の調査を行った渡辺・小松（1999）によると、体験率は27.5%であった。自由記述内容を自我体験とみなす基準について、研究者間の相違はあるだろう。しかし天谷（2002）の面接調査での体験率の高さと、本研究の結果をあわせ考えると、自我体験は少なくとも半数弱の人々に見られると推測される。

そして、学年による変化を検討するために、誤解群を除いた3群（誤解群の人数が全年で9名と大変少なかったので、分析から除外した）と中学から大学までの7学年のクロス集計表について、χ²検定を行った。その結果、人数の偏りは有意であった（χ²(12)=61.62, p<.01）。そこで残差分析を行った結果（Table1）、体験群は中2と高2有意に少なく、大学生有意に多い結果となった。そして未体験群については、中1と中2有意に多く、大学生有意に少ない結果となった。

未体験群について、他の学年よりも中1と中2が多いのは、調査時点で若い学年の子供はまだ自我体験を経ておらず、今後自我体験が見られる人が存在することを示す。また、大学生の未体験群は顕著に少ない。体験群について、中2と高2の有意差という結果が出たものの、未体験群は、学年が上がるにつれて減少する方向である（中1から順に39.9%, 40.1%, 25.9%, 28.0%, 35.0%, 29.8%, 8.0%）。よって全体的に見れば、学年が上がるにつれて体験率が高くなるのではないかと考えられる。

また大学生の体験群の顕著な多さについて、大学生の

<table>
<thead>
<tr>
<th>Table 1</th>
<th>自我体験の各群の人数とχ²検定の結果</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>未体験群</td>
<td>体験群</td>
</tr>
<tr>
<td>体験群</td>
<td>未体験群</td>
</tr>
<tr>
<td>未体験群</td>
<td>体験群</td>
</tr>
<tr>
<td>中1</td>
<td>55 (2.98)**</td>
</tr>
<tr>
<td>中2</td>
<td>59 (3.24)**</td>
</tr>
<tr>
<td>中3</td>
<td>36 (−0.95)</td>
</tr>
<tr>
<td>高1</td>
<td>28 (−0.21)</td>
</tr>
<tr>
<td>高2</td>
<td>36 (1.37)</td>
</tr>
<tr>
<td>高3</td>
<td>31 (0.15)</td>
</tr>
<tr>
<td>大学</td>
<td>12 (−6.30)**</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注。**p<.01, *p<.05
発達心理学研究 第15巻 第3号

360

Table 2-1 自己体験の自由記述例（第1セクション, n=231）

<table>
<thead>
<tr>
<th>記述内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>・自己はどこから来たのか。なぜぼくはあるのかと思った（中3男，小学校後半初）。</td>
</tr>
<tr>
<td>・生まれた存在とは分からなかった。だからこそ自分は自己の存在を考える必要がある（高3女，12歳初）。</td>
</tr>
<tr>
<td>質問項目1を2つ目にしてみました。どのように思ったか、自己が生まれる前には何だったのだろうか？</td>
</tr>
<tr>
<td>・質問項目1,2の両方とも。さらに自分は何かという問いに加えて、自己はどこから来た、自分は何で、自分と自己自体の関係を考察したものだ。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

＜存在への問い（27名, 11.7％）＞

<table>
<thead>
<tr>
<th>記述内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>・質問項目1についてひとかたちで思い出した。どんな喜びをもつ決まっている選択で、私はこの世に生まれたのだろう。</td>
</tr>
<tr>
<td>・質問項目5について多くの人間がいる中で自分が自己であることを不思議に思った。というのは、多くの人間がいる中で、</td>
</tr>
</tbody>
</table>

Table 2-2 自己体験の自由記述例（第2セクション, n=229）

<table>
<thead>
<tr>
<th>記述内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>・自分がなぜこのような日本のこの親の子どもとして生まれてきたのか、何をもってそれを区別されているのか（高3女，中3初）。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

＜存在への感覚的違和感（10名, 4.4％）＞

<table>
<thead>
<tr>
<th>記述内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>・質問項目3について遺伝的要素が同じでも別の人の人形に自分は深い思いをしていることがあるのだろうか？またそうだったなら自分</td>
</tr>
<tr>
<td>・質問項目2について顔をとっと見て「こいつはだれだ？」と思っていた。しばらく（5秒くらいか？）本当に自分を客観的に見たような気がした（高3女，中2初）。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：下線部は筆者の加筆部分。
Table 2-3 自我体験の自由記述例（第3セクション，n=129）

＜存在への問い（42名，32.6％）＞
- 第1項目，3，5，6についてなぜ私は自分なのか，友達に生まれれば私は友達になる．不思議に思った（中2女，小6初発）。
- 第2項目，6について友達といろいろな生き物がいるのに，どうして人間の自分なのかと思った（中3男，中1初発）。

＜起源・場所への問い（46名，35.6％）＞
- 自分はなぜ他の国や他の時代ではなく，日本のこの時代に生まれたのか，自分が自分のような考えていたらと思った（中3男，小6初発）。
- 第6項目について生まれる場所や時をたくさんあったはずなのに，どうしてここに生まれたのだろうと思った（大2女，中学初発）。
- なぜまたも私という人間に生まれてきたのか，この国，地域，この家族に子どもとして生まれてきたのか，なぜこの年には生まれてきたのか不思議に思っていてあります（大2女，中学初発）。
58.1％）。渡辺・小松（1999）の自己体験初発体験95例中51例においては、何らのきっかけ（例：死について考えて、自分を観察して等）が記述されている。通常、「きっかけがある」場合は、自己体験を思いきりやすい出来事がきっかけとして想定される。しかし、例えば同様に「死について考え」ても、自己体験に至らない人も存在するだろう。ようって、自己体験の生起に何らかのきっかけがある場合でも、それが直接自己体験を喚起していない可能性もある。知的好奇心や、認知発達的な枠組みといった広い視点から、自己体験がなぜ生起するのかを検討することが望ましい。

（c）自己体験の意味：自己体験の意味について、意味あり群と意味なし群の2群に分類した。意味あり群には、何らかの意味があると記述した人が含まれ、意味なし群には、「意味はなかった」と記述した人、「わからない」と記述した人、記述なしのが含まれている。その結果、意味なし群がやや多くを占めた（第1セッションからそれぞれ69.3％、68.6％、65.9％）。学年による変化を調べるために、7学年と意味あり・なし群のクロス集計表により、χ²検定を行った。その結果（Table3）、どのセクションも有意であった（第1セッションからχ²(6) = 26.80, p < .01, χ²(6) = 22.07, p < .01, χ²(6) = 13.41, p < .05）。各セクションについて、単差分析を行ったところ、第1セッションでは、中1と中2が意味あり群が有意に少なく、高2と大学生が、意味あり群が有意に多かった。第2・第3セッションでは、大学生が意味あり群が有意に多く、中1が意味あり群が有意に多かった。以上より、若い世代は、自身の自己体験に意味を見出している人が少なく、年齢の世代になると、それが多くなる可能性が示唆された。自己体験は、初発体験直後よりも、ある程度程度を経た、複数回体験された後、体験の渦からある程度抜け出して振り返ったりする場合に、意味を見出すことがあろうかもしれない。

また、自己体験に意味を見出した場合の内容について、は、ネガティブなものを報告した人はほとんど見られなかった。そして、自分を見つめることができたというものの、その数が多かった。「物の」「何の」人間や人生について考えたというものが見られた。自己体験にどのような意味を見出すかについての詳細な検討は今後の課題であろう。

（d）自己体験の印象：自己体験が被験者にとって印象的であったかどうかについては、どのセクションにおいても「印象的」の人が半数前後見られた（43.4％～52.4％）。そして、「それほどでもない」人が42.1～43.4％見られ、「印象的ではない」人は少なかった（4.3％～13.2％）。

（e）他者への開示：自己体験内容の他者への開示については、「なしの人がどのセクションも多かった（67.8％～82.0％）。自己体験は、多くが個人の内に閉じた体験として見られるかがうかがえる。

総合考察

本研究では、自己体験の様相を量的に捉えることを目的に、中学生から大学生を対象に、質問紙調査により、自己体験の体験度、初発時期、きっかけ・開示・意味付けの有無、自己体験の印象、自己体験の内容についての検討を行った。以下の3点について考察を行う。

1. 自己体験の体験度

体験度は、全体では半数弱であり、中学生の時期は明確に増加し、その後も増加する可能性が示唆される。また、自己体験は、「一種の昭示的体験」とし、強い感情を伴うものとして位置づけられている。本研究では、自身の自己体験を印象的と答えた人は半数前後である。本研究において、自己体験は、他の人にとっても強い感情を伴う体験と言えないかもしれないが、少しくとも記憶に残り、聞かれれば思い出して報告できる種類のものと言えるだろう。

さらに、自己体験は年齢が上がっても全ての人に見ら

<table>
<thead>
<tr>
<th>Table3</th>
<th>自己体験を経た意味</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>中1</td>
</tr>
<tr>
<td>第1セクション</td>
<td>意味あり（n=71）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>(調整された残差)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>意味なし（n=160）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>(調整された残差)</td>
</tr>
<tr>
<td>第2セクション</td>
<td>意味あり（n=72）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>(調整された残差)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>意味なし（n=157）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>(調整された残差)</td>
</tr>
<tr>
<td>第3セクション</td>
<td>意味あり（n=44）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>(調整された残差)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>意味なし（n=85）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>(調整された残差)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：**p<.01, *p<.05, +p<.10
れられる現象ではなく、自我体験を体験しやすい人と、そうでない人が存在することが示された。自我体験を経ない人にとっては、自我体験的な問いは意味を持たない。溝上（1999）は、人生的意味や精神的側面に関わるについて調べた尾崎（1997a, 1997b）の調査結果を分析し、人生の意味や目的を見出しが重要な意味を持つのは、それ「」探求している人々のみである点を指摘している。
つまり、自我体験においても、その問題が本人にとって重要かもしれない場合にのみ、その人にとっての存在価値が出てくるのではないかと思われる。今後、自我体験を体験しやすい人とそうでない人に関する要因や、自我体験の意味に関する検討が必要であろう。

2．自我体験の初発時期

本研究では、自我体験の初発時期を想定できない場合が多い結果となった。従って、自我体験については、初発が当人にインパクトを与えるわけではない可能性が考えられる。今後は、持続的生じたかという一点で捉えるよりも、初発を含めて自我体験の内容を考える期間（初発時期）という考え方をする方が、自我体験が当人により影響を考える点で意味があると思われる。
そして、初発時期を想定できる範囲内では、小学校後半を中心とした「子ども世代」とやや多いことが示唆された。今まで、「自分」の人生や生き方について哲学的・抽象的に考え悩むのは、主に青年期の課題とされてきた。これは、青年期以前の時期では、「自分」について、哲学的・抽象的に考えることができないという風にも捉えられる。しかし、永井（1996）は、子どもの哲学の根本問題は存在であり、青年の哲学の根本問題は人生であると述べており、またJaspers（1949/1954）も、根源的に哲学することが子どもにしばしば見られると指摘している。つまり、青年期以前の時期においても、哲学的・抽象的に「自分」について考えることはできるが、心理学ではあまり上げられてこなかったのである。
本研究では、「自分」について哲学的・抽象的に考える領域の中で、青年期に主に見られる「私2」の個々の人生や生き方に関する領域ではなく、「私1」について哲学的・抽象的に考える領域を扱っている。本研究の結果は、その意味で、青年期以前の時期でもとんどに哲学的に、抽象レベルの高い「人間」や「自分」について考えることができという点を実証的に示した点と思われる。
また、自我体験の初発時期について田畑（1998）は、早すぎる時期に自我体験を経ると、心理的危機を生じたような場合があることを指摘している。田畑（1989）では、小学校2年時の自我体験に関わる問題が、未解決のまま、この時期に承継されて心理的危機に陥った例を報告している。また天谷（2002）においても、自我体験時の感情として、恐怖感を感じるもの、不思議を感じるものその事例を報告している。よって、初発時期が早過ぎたり、長期にわたる場合は、自我体験における問いや、それに伴う感情の対処がうまく行われないことが考えられる。その結果、重篤な「自我体験期」を過ごすことになったり、その後心理的な問題が生じたりする場合があると思われる。

3．自我体験の位置づけ

本研究では、自身の自我体験に意味を見出した人は半数弱であり、意味づけを積極的でしていない人が多い結果となった。自我体験はある意味で「哲学的な」問いであるが、永井（1996）は、「子どもの哲学の特徴は純粋に知的であることをある。それによって何が変わるわけではない」と述べている。つまり、子どもにとっては、哲学的好奇心を追求しそれを満たそうとする過程にその存在価値があり、考えた結果どのような意味があるかについてはあまり関心がない可能性がある。その後成長して過去を振り返った場合に、その意味について考える場合もあるだろう。
また、自身の自我体験の意味をどう捉えるかについては、自身の自我体験を経る「深さ」との個人差も関わってくると思われる。つまり、積極的な意味付けをする必要がない「普通的考え事」に近いような浅い自我体験もあれば、その後の人生の方向性や世界観に影響を及ぼすような深い自我体験もあると考えられるのである。深い自我体験を経て当人にそしてその意味が無自覚なのかそれとも、自我体験に没入してその意味を考える段階に至り、その意味について関心がない場合もある。例えば、永井（1996）は自我体験に見られるような問いを考えることについて、「それによって何が変わるわけでもない」などと述べているが、永井自身はこの問いを重く捉えて哲学者となったと思われる。つまり、永井にとっては、この問いはその後の職業選択にも影響したほど重要であったにも関わらず、その意味が気付いていないと思われる。本研究において、自我体験に意味を見出した人が半数弱であったのは、浅い自我体験を経た人と、永井のように深い自我体験を経たにも関わらず無自覚な人、またその意味を考える段階に至らない人が多かったという解釈が考えられる。
そして、自我体験は青春期後半に初発することが多く、他者への関示も見られず、「私」について問いかけられる現象であるという結果から、自我体験が青春期のはじめとしての現象としても捉えられるはずである。しかし、前述したように、青春期における問いは個人的な「私1」の人生や生き方に関する主題となり、自我体験における問いは、「私2」ではなく「私1」に焦点づけられた問いとなると図は事実上の異なると思われる。よって、自我体験は青春期のはじまりとしてではなく、児童期から青春期の間の期間における現象と捉えられるべきと思う。
われる。
また、自我体験を問われる「私」は仮定的なものであり、想定すること自体が誤りという考え方に立つ。著者が考えている。本研究では、「私」の想定自体が誤りかどうかについては言及せずに進めたが、このような「私」の想定自体が、乳児期後半から青少年期に特有に見られる考え方である可能性がある。本研究において、自我体験の内容を他者に開示しない人が多くを占めたのも、自我体験の内容が、ある意味「現実的でない」考えと自覚され、自分の心の内にのみと認めている人が多いのかもしない。

問題点と今後の課題
本研究の結果、今後の課題にいくつか残された。うち2点を挙げると、まず第1に調査方法についての問題が挙げられる。本研究では、あらかじめ質問項目を3セクションに分けた。これは、本研究では、被験者に多くの自我体験を記述してもらいたかったという目的があった。その結果、多くの記述が得られたが、被験者にとっては、それが3つの体験ではなく1つの体験として捉えられている場合もあるが、被験者の主観を招く結果となった。今後は、質問項目をセクションに分けずに構成する必要があるだろう。
そして第2に、自我体験を経た人についての詳細な検討が求められる。本研究では、自我体験を経た人をすべて一つの群にまとめて検討をおこなった。しかし、自我体験を経た人について、通常見られる時期に、重篤でない、通常の「自我体験期」を経た群と、重篤な「自我体験期」を経た群といった、体験の深さの観点から群分けして検討すると、自我体験は当人に与える影響についての考察が深まると思われる。

文献
天谷祐子。（1999）。面接法による自我体験の調査方法について。名古屋大学教育学部紀要（心理学）第46号、名古屋大学、名古屋、265-274。
天谷祐子。（2002）。 「私」への「なぜ」という問いについて。面接法による自我体験の報告から。発達心理学研究、13、221-231。
覆木博明。（1998）。「自己」の心理学—自分探しへの誘い。東京：サイエンス社。
Fenigstein, A. S., Scheier, M. F., & Buss, A. H. （1975）。
Public and private self-consciousness: Assessment and theory。Journal of Consulting and Clinical Psychology, 43, 522-527。
James, W. （1992）。心理学（上）（今田・富・訳）。東京：岩波書店。
James, W. （1892）。Psychology, Brief Course。Notre Dame Indiana: University of Notre Dame Press。
Jaspers, K. （1954）。哲学入門（草薙正夫・訳）。東京：新潮社。（Jaspers, K. （1949）。Einführung in die Philosophie。Türiuch: Artemis Verlag。）
松田 優。（1983）。自己意識。波多野康治・依田 新（編）、児童心理学ハンドブック（pp.640-664）。東京：金子書房。
松田 優。（1986）。自己意識の発達に関する最近の研究。教育心理学年報、25、54-63。
松田 優。（1990）。自己・自我。無藤 隆・高橋恵子・田島信元（編）、発達心理学入門Ⅰ：乳児・幼児・児童（pp.210-222）。東京：東京大学出版会。
宮崎光子。（1986）。自我発達における小学校中学年の位置づけ（2）：自我発達度を通して。日本教育心理学学会第28回総会発表論文集、372-373。
溝上慎一。（1999）。自己の基礎理論—実証的立場のパラダイム。東京：金子書房。
永井 均。（1991）。＜魂＞に対する態度。東京：勤労書房。
永井 均。（1996）。＜子ども＞のための哲学。東京：講談社。
永井 均。（1998）。＜私＞の存在の比類なさ。東京：勤労書房。
中島 憲。（1991）。＜私＞の射程。イマゴ、1991年6月号、66-73。東京：青土社。
西村宗男。（1978）。思春期の心理—自我体験の考察。中井久夫・山中康裕（編）、思春期の精神病理と治療（pp.255-285）。東京：岩崎学術出版。
尾崎仁美。（1997a）。人生における意味・目的の“獲得”と“探求”から捉えた人生態度の検討（1）。日本心理学会第61回大会発表論文集、81。
尾崎仁美。（1997b）。人生における意味・目的の“獲得”と“探求”から捉えた人生態度の検討（2）〜空しさの観点からの検討。日本教育心理学学会第39回総会発表論文集、220。
田中洋子。（1985）。「私は誰だ。」の答を求めて：ある登校拒否女子高生の自我体験。心理臨床学研究、2、8-19。
高石敬子。（1988）。青年期の自我発達と自我体験について。京都大学教育学部紀要第34号、京都大学、京都、210-220。
魚住洋子。（1998）。身体（IV定義集）。村田純一（編）、新・哲学講義：4「わたし」とは誰か（pp.210-211）。東京：岩波書店。
渡辺恵夫・小松栄一。（1999）。自我体験：自己意識発達研究の新たな地平。発達心理学研究、10、11-22。
This paper reports on research on “ego-experience,” that is, questions about “I” such as “Why am I ‘I’?,” “Why do I exist?,” and “Why was I born at this particular time rather than at a different point in time?,” along with the feeling that one’s appearance is strange. The purpose of the study was to examine when ego-experience appears, the percentages of people who reported their own ego-experience, feelings about ego-experience, and whether participants told others about their experience. Participants (N=881) were in the age range between junior high school and college. 379 of the participants reported having an ego-experience, mainly between 9 and 12 years of age. These results suggested that ego-experience is a common but not universal phenomenon.
【Key Words】“I”, Questions, Ego-experience, Survey research
2003. 2. 3 受稿, 2004. 3. 2 受理